



TITLE:

意味現實態

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 意味現實態. 經濟論叢 1927, 25(2): 197-220

ISSUE DATE:

1927-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128570>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第

卷五十二第

行發日一月八年二和昭

論叢

營業稅の課稅標準

法學博士 神戸正雄

文化現象の凝集作用

法學士 恒藤恭

意味現實態

文學博士 米田庄太郎

國家の組織

法學士 作田莊一

近世の港

文學博士 三浦周行

說苑

リカ
アド 勞賃論とサス人口原則

經濟學士 森耕二郎

植民及び植民地の意義

經濟學士 長田三郎

雜錄

フォードの勞賃論

經濟學士 星野周一郎

一九二六年度の英國銀行界

經濟學士 道上清治

國際經濟會議

法學士 汐見三郎

意味現實態

米田庄太郎

(一) ミルの社會法則の概念と余の從來の見解

余は本雜誌前號までに於て公にせる「ミルの社會學概念」、「ミルの經濟學概念」、及び「ミルのエソロジー論」等によりて、ミルの社會科學論の一般をかなり詳しく説述したが、是れより其の批判的考察に移ることにする。

今ミルの社會科學論殊に社會學論を批判的に考察せんとするに當つて、今日の社會學の立場から見て先づ第一に注目すべきは、社會學を始め一切の社會科學は本來自然科學であつて、普遍的な因果必然性を表現する社會法則、即ち社會的自然法則を發見することを、其の認識目標となす可きものであるが、併し實際に於てかゝる法則を發見することは殆んど不可能にして、一般的には吾人は只因果關係の蓋然性が可能性かを決定し得るだけであると云ふ彼の見解である。此の見解は近頃まで、社會學を科學と見て之を建設せんとする人々の一般に抱持せるもの、又今日でも

英米佛等の諸國に於ける科學的社會學者が、根本的には一般に抱持して居るものであると思はれる。されば右のミルの見解は社會學史上甚だ重要な意義を有するのみならず、今日の社會學論に於てもヤハリ重要な意義を認めらる可きものである。

余は千八百九十四五年頃から、社會學を專攻することに決心したので、そうして當時の科學的社會學の一般の傾向に従ひ、社會學は一般科學或は特殊哲學として建設さる可きものと信じて居た。但し余は當時科學的哲學を遵奉して居たので、方法論的一元主義をとり、方法論上哲學と科學との間に何等の差別を認めず、只其の對象の普遍性の大小によりてのみ、哲學と科學とは區別されるのであると考へ、かくて特殊科學に對して一般科學と稱せられるものは、一般哲學に對して特殊哲學と稱せられるものと、實質的に一致すると認め、そして社會學を寧ろ一の特殊哲學と見る見方を選んで居たのである。當時余が社會學を學んで居たギッディング先生は、社會學を一般科學と見て居られたのに、實質的には夫れと一致すると認めながらも、余が特に社會學を一の特殊哲學と見る見方を選んだのは、主として伊太利の法理學者社會學者ヴァンニの影響によるので、余は Vanni の好著 *Prime Linee di un Programma Critico di Sociologia* を、千八百九十七年十二月十二日(所藏の同書に書き入れてある購入の日附けによる)に手に入れ、同年の冬期休業中に熱心に閱讀したのであるが、同書から受けた影響は永く残つて居た。併し余の特殊哲學と見

たる社會學の學問論的性質は、根本的にはミルの説くが如きものに外ならなかつた。されど其の頃は余はあまり社會學論に興味を有たず、専ら實質的問題の研究に力を注いで居た。其の後千九百年に佛國に渡りてタールド先生に就き、又其の他の諸家の講義も聴いたが、併し余は専ら著書雜誌によりて、諸家の説を研究することに力を盡くし、あまり聴講を重要視しなかつた。そうして英米獨佛伊西等の主要なる社會學書を涉獵した。千九百二年正月歸朝して後も、まだ自分の研究の未熟なるを自覺して、敢て自分の社會學體系を立てんとする考へを起して居なかつたが、とにかく一先づ余の社會學の研究を纏める機會を與へられたのは岡山縣教育會であつた。明治三十八年(千九百五年)同教育會より夏期講習會に於て、一週間社會學を講述することを依頼されたが、余は此の時始めて余の社會學の研究を一先づ取り纏めたのである。(同講義は「現今の社會學」と題して、同教育會より明治三十九年非賣品として印行された)併し其後間もなく同講義に於て述べた社會學論に不満を感じて之を修正したが、明治四十年京都帝國大學文學部の講師を囑託され、社會學の講義を始めた際、其の修正せる社會學論を述べたのである。但し其頃余はベルグソンの哲學書を愛讀して居たから、余の哲學概念に多少變動を生じて來たが、併し大體上社會學をヤハリ一の特殊哲學と認め、そうして之を組織社會學と純正社會學と總合社會學との三部門に大別した。尙ほ明治四十一年にリッケルトの著作に接したことは、更に余の哲學及び科學の概念に動搖を生じて來たが、併し大體上ヤハリ社會學を特殊

哲學と認め、そうして之を右の三部門に大別する見解を保持して居たので、大正二年日本社會學院第一卷に於て公にせる社會學論は、同一方針に於ける余の思想の最も纏まつたものである。然るに其後余は益々軌近の獨逸哲學に注目するに至つて、余の哲學及び科學の概念に大なる變動を生じ、余は方法論上よりして兩者を嚴格に區別し、そうして科學としての社會學を哲學としての社會學、即ち余が卒直に社會哲學と稱するものから嚴格に區別し、兩者を對立させつゝ、相伴なふて發達させることが、社會學の健實なる發達を圖る爲めに、最も肝要であることを覺つた。

余は決して哲學としての社會學即ち社會哲學を排斥するものでない。否な社會哲學は社會に對する吾人の學問的欲求を完全に充足する爲めには、必要缺く可からざるものであると信ずる。吾人の社會に對する學問的欲求は、決して科學的知識だけで完全に充足されるものでなく、哲學的知識によりて補充されねばならない。併し哲學的知識と科學的知識とは、夫れ／＼其の知識目標を根本的に異にするものであるから、科學の研究に哲學的知識目標を混することは、科學の發達の爲めに甚だ有害である。そうして余は今日に至るまで、眞に科學としての社會學の發達を大に妨害せるものは、哲學の混入であると信ずる。かくて余は社會學に於ける哲學的分子の混入を排除するまでは、社會學は決して眞に科學として發達することは出來ないと考へて居る。例へば今日社會學を始め多くの社會科學は階級的性質を帶びて居る。そうして社會科學は必然的に階級的

性質を具有するもの、如く論ずる人々がある。是れ今日の社會科學は一般に社會哲學を混交して居るからである。そうして夫れが爲めに大に階級的利害の影響を受け、科學としての健實なる發達を遂成することが出来ないのである。併し余は社會哲學は殆んど不可避免的に階級性質を具有するが、社會科學は全然階級的利害を超越し、無階級的なものであり得る、否なあらねばならぬと信する。又全然階級的利害を超越し、無階級的なものとなることによりて、始める健實なる發達をなし遂げ得るものと信するのである。若し何人かの説く社會科學が階級性を帯びて居るとすれば、夫れは其の階級性を帯びて居るだけ社會哲學を混交して居るのである。されば今日の如くに階級意識の殊に熾烈なる時代に於ては、吾人の右に述べし點によく注意し、哲學的分子を全然排斥して社會科學の發達を圖することは、甚だ肝要であると思はれる。

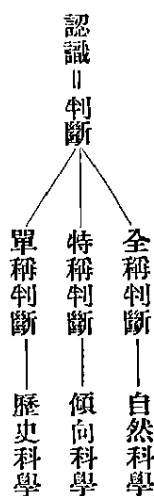
然らば社會哲學から嚴格に區別される科學としての社會學の學問論的性質は、如何なるものである可きか。余は數年前までは科學としての社會學の學問論的性質を、根本的には上に述べしミルの見解に従ふて規定して居た。但し余はミルの如く社會法則は本來自然法則である可きものと見たのではないが、併し彼が實際に於て一般的に社會法則の真相をなすと見るものの究明、即ち社會現象間に於ける因果關係の蓋然性或は一般的可能性の究明を以て、社會學を始め一切の社會科學の認識目標であると見て居たのである。尙ほ又ミルの如く因果關係の蓋然性或は一般的可能性

を表現する公式或は命題は、自然法則より論理的價値の劣れるもの、随ふて一般的にかゝる公式或は命題しか樹立し得ない社會科學は、自然科學に屬するものであるが、しかも其の中の劣等なるものであるが如くに見做したのでなく、因果關係の蓋然性或は一般的可能性は、普遍的因果必然性に對立する一の範疇にして、之を究明せんとする科學は普遍的因果必然性を究明せんとする自然科學に對立する、一の獨立なる科學部類であると考へて居たのである。そうして余はかゝる見解を、リッケルトの科學論やマックス・ウェバーの科學論を參照して、ミルの社會科學論を精練することによりて定立したのである。

要するに余は普遍的因果必然性を究明する自然科學と、個性的因果必然性を究明する歴史科學とを、方法論上確立される科學の根本的二部類と見るリッケルトの説を、嚴密には普遍的ではないが、しかし又全く個性的でもなく、或度の普遍性を有する一範疇として、因果關係の蓋然性或は一般的可能性を認め、そうして夫れを究明する一の科學部類として、傾向科學或は定型科學なるものを立てることによりて補充せんとした。そうして此の傾向科學或は定型科學の概念を規定するに當つて、マックス・ウェバーの定型學の概念を參考したのである。但し余は傾向科學の概念を、千九百八年(明治四十一年)に公にされたローゼンタールの論文によりて學び、明治四十二年度の講義中に少しく述べて置いたが、夫れはまだ甚だ粗雑なものであつたので、マックス・ウ

エバーの説を參考して始めて確定することが出来たのである。

尙ほ余は右に述べし如くに、科學を方法論的に自然科學と傾向科學或は定型科學と歴史科學との三部類に大別するに當つて、其の認識論的基礎を判斷の分類に求めた。即ち先づ認識は判斷であるを認め、そうして判斷が全稱判斷と特稱判斷と單稱判斷との三種に大別されるに準じて、全稱判斷の組織的體系を自然科學、特稱判斷の組織的體系を傾向科學、單稱判斷の組織的體系を歴史科學と見たのである。



かくて余はミルの社會科學概念の眞髓を、傾向科學或は定型科學としては發展させ、一切の社會科學は傾向科學或は定型科學の部類に屬するものと見て、科學としての社會學を建設し、ヤハリ之を組織社會學と純正社會學と総合社會學との三部門に區別した。要するに社會學は社會現象間に於ける因果關係の一般的蓋然性或は可能性を究明する傾向科學であると云ふのが、即ち余が從來の方針に於て到達せる最後の論結であつたのである。

然るに近年に至つて、余は右の論結にも満足することが出来なくなつた。そして從來の方針が

ら根本的に一轉向を爲さんと企だて、來た。夫れはつまり獨逸に於ける學問論の軌近の發達を、一層深く了解して來たが爲めであると思ふ。そして此の轉向の機會を與へたるものは、マックス・ウェバーの了解社會學の概念である。

(二) 余の見地の一轉向

余は前節に述べし如く、自然科學及び歴史科學に對立する一の科學部類として、傾向科學或は定型科學なるものを立てることによりて、社會現象に於ける因果關係の一般的蓋然性或は可能性を究明せんとする科學として、社會學を學問論的に基礎附けることが出來たと信じたのであるが、併し更に深く反省して見ると一の重大なる疑問が起つて來た。今科學は總て結局は因果關係を究明するものと解するに於ては、蓋然性或は可能性を究明することは、ミルの巧妙に辯說せる如く實際的には重要な意義或は價值を有し、又實際的には一般的に夫れで充分であるとしても、純理論的には普遍的必然性や個性的必然性を究明すること、同一の意義或は價值を有するものと認め得られない。かくて傾向科學は判斷の三種の區別に準じて、形式上自然科學及び歴史科學に對立する一の科學部類として承認されることが出來ても、實質的には其の理論的價值は結局兩者に劣るものとならざるを得ない。されば因果的見地に於ては傾向或は定型を究明するに止

まる社會科學に、自然科學及び歴史科學と同等な理論的價值を認めることが出來ない。かくて社會科學を理論的價值に於て、自然科學や歴史科學と同等なるものとして基礎附けんとするに於ては、吾人は實際的ではなく理論的であるが、しかも因果的でなく、且つ之れに對立する一見地を樹立せねばならぬ。然らば其の見地は如何なるものである可きか。

今因果の見地或は原因見地に對立するものとして、一般的に認められて居るものは目的見地であるが、夫れは更に超越的目的見地と內在的目的見地とに大別されて居る。そうして前者は本來哲學的又は實際的なものであるが、後者は科學的であり得る。かくて科學に於て原因見地或は因果の見地に對立して、一の獨立なる見地と認めらる可きものは內在的目的見地である。されば社會科學を方法論上自然科學及び歴史科學と、理論的に同等なる價值を有する科學として基礎附けんとするに於ては、吾人は原因見地によりて建設される科學部類の外に、又之れと並立する處の、內在的目的見地によりて建設される科學部類を認めねばならない。是れ余の近年到達せる見解である。もつとも一般的に見れば、社會科學に於ても此の見解は決して新しきものでない。シユタムラーなどの見解は、既に內在的目的見地に基いて社會科學を基礎附けんとせるものと認め得られる。併し従来少なくとも社會科學に於ては、目的見地をとる人々は一般に社會科學を社會哲學に化成し、又は社會科學に社會哲學を混交して居ると思はれる。それで余が新たに問題として

考究し始めたのは、如何にして内在的目的見地を純科學的に保持し得るか、即ち如何にして内在的目的見地によりて、純粹なる科學を建設し得るかと云ふことである。余は内在的目的見地によりて純粹なる科學を建設し、原因見地によりて建設される科學部類に並立する一の科學部類が確立されることによりて、此處に始めて社會科學は純粹なる科學として基礎附け得られ、そうして自然科學及び歴史科學と同等な理論的價值を有するものとなり得ると信するのである。然らば如何にして内在的目的見地によりて、純粹なる科學が建設し得られるか。

(三) 内在的目的見地と社會科學

さて超越的目的見地と云ふは、つまり合目性は外部から設定されたる目的或は目標に基いて存立すると見る見地であるが、之れに對して内在的目的見地と云ふは、つまり合目性は事物其物に存する何等かの因素より生起するものと見る見地である。そうして其の事物其物に存する因素とは、一般に欲望或は欲求とか、衝動とか、關心とか、意思作用とか、内在的目的原因とか、目標欲求性とか稱せられるものである。但し此等の諸概念、殊に内在的目的原因の概念や、目標欲求性の概念や、意思作用の概念などには、哲學的要素が混入し易いから、内在的目的見地を純粹なる科學的見地として保持せんとするに於ては、吾人は其の點によく注意せねばならぬ。尙ほ社會

現象或は社會的現實態に於て、其の内在的目的と認めらるべき因素は、如何なるものである可きや。後は後に論ずるから、此處では只内在的目的見地の一般的概念を規定するだけに止める。要するに余の内在的目的見地と云ふは、原因見地或は因果見地と異なりて、事物の行動或は作用を外部から加へられる原因によりて、器械的に生起するものと考へず、事物其物に内在する或因素によりて志向的に生起するものと認め、そうして其の内在的因素或は目的から見て、事物の行動或は作用、其の關係及び生産物を志向的に認識せんとする見地である。

今余が内在的目的見地と稱するものは、一般的に右に述べしが如きものとすると、夫れはつまり科學の對象となる經驗的事物即ち現實態は、結局二つの部類に大別されるものなるを前定して居る。其の一は外部的因果關係によりて器械的必然的に成立し、運動し、變化し、產出する現實態の部類にして、其の二は内部的目的關係によりて志向的可能に成立し、行動し或は作用し、變化し、產出する現實態の部類である。余は先づ前者を物的現實態と稱し、後者を心的現實態と云ふ。但し經驗的事實として物的現實態は、心的現實態を離れて存立すると考へ得られるが、心的現實態は物的現實態と何等かの關係に於て存立するものにして、全然物的現實態との關係を離れては存立しない。かくて物的現實態から全然分離して考へられる心的現實態の概念は、稍々抽象的なものである。此の點は文化の概念を正當に規定する爲めに甚だ肝要なるものであるが、

詳しくは後に論述する。

余は右に述べしが如き意味にて、科學の對象たる現實態を根本的に物的現實態と心的現實態との二大部類に分つことによりて、科學を其の對象の上から見て先づ物的科學と心的科學との二大部類に區別し、そうして社會科學を根本的には心的科學と見ることによりて、以て社會科學の學問論的基礎附けを企てんとするのであるが、夫れに就ては尙ほ豫め規定して置かねばならぬ幾多の概念がある。此處では只直接に最も重要なもの二三を概論するに止める。

(四) 哲學と科學と規範學

先づ第一に規定して置かねばならぬものは、哲學と科學と規範學との區別である。此の三者は從來社會科學に於て一般に混交されて居るから、社會科學をさきに述べし如くに階級的利害を超越し、全く階級性を有しない純科學として建設せんとするに當つて、吾人は特に三者の區別に注意せねばならないのである。

今哲學と科學との區別に就ては、今日までに既に種々なる見解が呈出されて居る。又今後更に新しき見解が唱出されるかも知れない。併し此處に諸種の見解を批判する暇はないから、只余が今日到達して居る見解を、極簡単に陳述するだけに止める。

余は先づ學問とは一般に知識の組織的體系であると見る。稍々詳しく云へば一定の對象領域に關する組織的知識の體系である。そうして其の知識目標の差異によりて、根本的に一定の部類に大別されるものと見る。然らば學問の知識目標は根本的に幾種に大別されるか。余は之を三種に大別する。其の一は對象の認識にして、其の二は對象の本體洞見或は本質諦觀又は評價、其の三は對象の規整或は督制の公式である。そうして余は對象の組織的認識の體系を科學と稱し、對象の本體洞見或は本質諦觀又は評價を哲學と稱し、對象の規整或は督制の公式の體系を規範學と云ふ。然るに余は總て學問の對象となるものは、經驗的事實即ち現實態であると見るのであるから、科學とはつまり現實態の組織的認識の體系にして、哲學とは現實態の本體洞見或は本質諦觀又は評價(詳しく云へば絶對的價値の評定)の體系、規範學とは現實態の規整或は督制の公式の體系である。但し右の如くに學問其の物を組織的に究明することも亦、學問の根本的一部類であつて、余は之を學問論 (Wissenschaftslehre) と稱するのであるから、余の立場から詳しく云へば、學問はつまり學問論と科學と哲學と規範學との、根本的四部類に大別されるのである。

右の如くに一切の學問を、根本的に四部類に大別するは、學問の研究の大に發達せる今日の狀態に於て、更に將來の發達を豫想して立てられたる見解にして、從來は何れの個々の學問に於ても右の諸部類は種々に混交されて居たのである。尙ほ今日にありても社會的學問にありては、さ

きにも述べし如く右の諸部類は種々に混交されて居る。殊に科學と哲學との混交は殆んど一般に行はれて居るので、社會科學は純粹なる科學である可きであると主張する人々の所説も、詳しく吟味して見ると、種々なる哲學的思想の混交して居ることが發見されるのである。そうして哲學的思想の混交は社會科學の必然的性質にして、又其の點が社會科學を自然科學から區別する根本的一特徴であると、主張する人々さへあるのである。併し余はさきに述べし理由によりて、社會科學は嚴格に社會哲學から區別され、純粹なる科學として建設されるに非らずば、到底健實なる發達を遂成することが出来ないことを確信して居るのである。そうして夫れが爲めは、現實態の組織的認識の體系としての科學の性質及び分類を、更に詳しく究明せねばならぬ。蓋し從來一般に行はれて居た見解の如く、科學と云へば總て方法的に自然科學と稱せられるもの、即ち結局は普遍的因果必然性を究明するものと解するに於ては、社會科學は到底眞實なる科學として建設されることが出来ないからである。されば社會科學をして方法的に眞實なる科學として基礎附ける爲めには、さきに述べし如く吾人は方法論上自然科學に對立或は並立する科學の一部類を確立せねばならない。然らば吾人は如何にして方法論上自然科學に對立する一の科學部類を確立することが出来るか。余は此の點から見て、先づ西南獨逸派の科學論に甚だ重要な價值を認めるのである。

(五) 自然科學と歴史科學

科學と云へば總て方法論的には自然科學、即ち普遍的なるものを探究し、普遍的因果必然性を究明するものと考へられ居た傳來の見解に對して、個性的なるもの及び個性的因果必然性を究明する科學としての歴史科學の科學的獨立性を主張し、其の學問論的基礎を確立せんとしたるは、學問論の發達に於ける西南獨逸派の大なる功績であると思はれる。吾人は西南獨逸派の論究によりて、自然科學の外に歴史科學なる一の獨立なる科學部類の存立することを明かに學び、歴史を科學化するとは嘗て一般に考へられた如く、之を自然科學化する事ではなくして、其の特質を學問論的によく理解して、益々十分に發揮する事であることを、眞に會得する事が出來たのである。

今西南獨逸派の所說によると、科學は先づ方法論上二つの認識目標を有つて居る。其の一は現實態を普遍化して認識することにして、其の二は之を個性化して認識することである。そうして此の認識目標の區別に準じて、科學は方法論上普遍化科學と個性化科學との二大部類に根本的に區別される。然るに普遍化方法は即ち從來自然科學と稱せられるもの、生命であるから、吾人は自然科學の概念を方法論的に解釋して、普遍化科學を自然科學と稱することが出来る。そうして之れに對して個性化方法は、從來歴史と稱せられるものが、認識論的にはよく意識して居なかつ

たが、しかも實際上其の生命として居たものであるから、吾人は個性化科學を歴史科學と稱することが出来る。かくて方法の上から見れば、科學は根本的に自然科學と歴史科學とに大別されるのである。

然るに科學は方法上から見て、右の如くに自然科學と歴史科學とに大別される上に、更に其の對象たる現實態が、自然であるか又は文化であるかによりてヤハリ自然科學と文化科學とに根本的に大別される。そうして科學の對象たる自然は、普遍化的即ち自然科學的にも亦個性化的即ち歴史科學的にも研究され得ると同様に、科學の對象たる文化もヤハリ個性化的即ち歴史科學にも亦普遍化的即ち自然科學的にも考究され得るから、かくて形式的には科學は、普遍化的或は自然科學的自然科學と個性化的或は歴史科學的自然科學、及び個性化的或は歴史科學的文化科學と普遍化的或は自然科學的文化科學との四部類に、區別されることとなる。併し實質的に考へると、吾人が自然認識に於て主として求める知識は、自然の特質上からして特に普遍化知識であり、又之れに對して吾人が文化認識に於て求める知識は、文化の特質上からして特に個性化知識であるから、自然を對象とする自然科學にありては、普遍化方法を用ひる方法上の自然科學が特徴的意義を有し、文化を對象とする文化科學にありては、個性化方法を用ひる歴史科學が特徴的意義を有するのである。

西南獨逸派の人々は右に述べしが如き見解からして、自然科學にありては個性化的或は歷史科學的自然科學に注目し、特に其の論理的構造を考究する人々もあるが、併し一般には主として普遍化的或は自然科學的自然科學を重要視し、自然科學と云へば直ちに之を普遍化的或は自然科學的自然科學と解する傾向があり、又文化科學にありては形式上理論上普遍化的或は自然科學的文化科學の可能性を認めながらも、一般には特に歷史科學的或は個性化的文化科學を重要視し、文化科學と云へば直ちに歷史科學的文化科學と解する傾向がある。かくて西南獨逸派の人々は普遍化的文化科學として社會科學の存立し得ることを理論上認めて居るに拘らず、實際に於ては之を殆んど無視し、歷史科學的文化科學としての社會科學の論理的構造の研究に専ら力を注いで居る。尙ほ末派の人々に至つては、社會科學は只歷史科學としてのみ存立し得るものにして、理論上に於ても普遍化科學或は自然科學的科學としては、全く存立し得ないものゝ如くにさへ論じて居る。

併し西南獨逸派の歷史科學論の價值を十分に承認すると同時に、之れに全く魅惑されずして批判的に考察する社會科學者にありては、社會科學を全く歷史科學的なるものに化成せんとする見解は、到底是認されることは出来ない。社會科學は從來普遍化知識を目標として來た。そうして其の普遍化の意味を、自然科學的普遍化と同じ意味に解し、自然科學と同様な普遍化科學たらん

と企だて、居たことは、間違ひあつたとしても、とにかく全然個性化科學即ち歴史科學であるだけで満足せず、如何様にかして普遍化科學とならんとし、普遍的知識を求めて來たことが間違ひであつたとは云はれない。しかも自然科學の意味での普遍的知識は、文化的或は社會的現實態に於ては決して求め得られないとすれば、其の求める普遍的知識なるものは、自然科學的普遍的知識とは異なるものであらねばならぬ。然らば如何に異なる可きか。

今自然科學的普遍的知識の普遍性は絶對的なもの、即ち例外を許さないものである可きであるが、然るに文化的或は社會的現實態に就て、かゝる普遍的知識を求めることは不可能であるとするれば、夫れに就て求められる普遍的知識は相對的なもの即ち例外を許すものである可きである。つまりミルが社會現象の續起或は共存の蓋然性又は可能性と稱せるが如きものである可きである。それで注意深き社會學者は普遍的知識と一般的知識とを區別し、前者は絶對的普遍性を有するものであるが、後者は相對的普遍性を有するだけのものであると解し、そうして社會科學は普遍的知識を求めるものでなく、一般的知識を求めるものとして成立すると論じた。是れつまりミルの思想を簡明に表現せるものと見做す可きで、そうして余もさきに述べし如く、近年までは同様な考へを抱き、普遍的知識が法則と稱せられるに對して、一般的知識を傾向又は定型と稱し、法則を探究する自然科學に對して、傾向又は定型を探究する傾向學又は定型學なるものを立て、

更にさきに述べし如く判断の三種の別に準じて、傾向學を認識論的に確立せんとしたのである。然るにヤハリ上に述べし如く近來に至りて、科學は總て結局は何れかの形式に於ける因果關係或は因果聯結を究明せんとするものと見るに於ては、傾向學は到底自然科學及び歴史科學に對して、同等な理論的價値を有するものとして確立され得ないものなるを覺り、そうして科學は因果關係或は因果聯結を究明せんとする外に、又志向的關係或は志向的聯結をも究明せんとするものであると考へ、因果聯結を究明せんとする科學の外に、志向的聯結を究明せんとする科學が存立することを認め、夫れによりて余が傾向學或は定型學と稱せるものが、始めて自然科學及び歴史科學に對して、同等の理論的價値を有する科學部類として確立され得ると考へるに至つたのである。要するに余は科學の認識目標は單一なるものでなくして二種に分れ、其の一は因果聯結を究明せんとするものにして、其の二は志向的聯結を究明せんとするものであると認め、そうして此の如くに科學の認識目標が二種に大別されるのは、つまり科學の對象たる現實態が其の構造に於て根本的に二種に大別され、隨ふて又之を認識する作用がヤハリ二種に大別されるからであると、考へるに至つたのである。それで此處に余が更に論述せねばならぬことは、現實態の二種の別と、認識作用の二種の別とである。

(六) 意味現實態

余は本論文(二)及び三(三)に於て、科學の根本的見地に原因見地と內在的目的見地との別あるを説き、又前節に於ては科學の認識目標に因果的聯結を究明せんとする目標と、志向的聯結を究明せんとする目標との二種あるを説いたが、要するに因果的聯結を究明せんとする目標を實現する見地が、即ち原因見地にして、志向的聯結を究明せんとする目標を實現する見地が、即ち內在的目的見地である。そうして科學は其の目標及び見地に於て、根本的に二種に大別されるのはつまり上に述べし如く、科學の對象たる現實態は根本的に二種に大別されるからであり、隨ふて又之を認識する作用が根本的に二種に大別されるからである。されば科學の根本的區別はつまり對象の根本的區別に基因するので、一時流行せる科學分類論上の一見解即ち科學は根本的には方法によりて區別さる可きものにして、對象によりて區別さる可きものでないと云ふ見解は、まだ充分に深く科學分類の基礎を究明せるものでないことが覺られるのである。然らば現實態は根本的に如何に二種に大別されるか。

余は三(三)に於て述べし如く、現實態を先づ物的現實態即ち外部的因果關係によりて器械的必然的に成立し、運動し、變化し、產出する現實態と、心的現實態即ち內在的目的關係によりて志向的

可能的に成立し、行動し或は作用し、變化し、産出する現實態とに大別したのであるが、今心的現實態を右の如きものと解するに於ては、夫れは物的現實態に對して意味を有するもの即ち意味現實態と稱し得られる。但し意味と云ふ語は今日學問上種々なる意味に用ひられて居るのであるが、余が此處に用ひる意味では、つまり器械的でなくして志向的であることを表示するのである。要するに物的なるものは本來器械的にして、志向的でないから、意味を有しないものであるが、心的なるものは本來志向的であるから意味を有するのである。かくて心的なるもの、有する意味とは、つまり其の志向性の質を云ふので、そうして余は志向性の質は本來關心によりて決定されるものと見るのである。約言すれば余は心的現實態は意味現實態にして、意味現實態とは志向性によりて成立するもの、そうして志向性は本來關心によりて決定されるものと考へるのである。

然るに余が心的現實態或は意味現實態と總稱するものは、更に根本的に二種に大別されたと見る見解が、今や汎く承認されて居る。其の一は主觀的體驗にして、其の二は主觀的體驗によりて吾人に把握されるが、しかも夫れは只主觀的體驗によりて把握されるだけで、主觀的體驗によりて産出されるものでなく、夫れ自身に於て存立すると認められるものである。そうして前者が心的なるものと稱せられるに對して、後者は精神的なるもの或は觀念的なるものと稱せられて居る。

る。かくて現實態の存在様式は物的と心的と精神的或は觀念的との、三種に大別されるのである。隨ふて主觀的なるものに對立する客觀的なるものに、物的客觀的なるものと精神的客觀的なるものとが區別されて居る。そうして右の見解からして文化とは心的なるものと、物的なるものと、精神的或は觀念的なるものと、三者の特異なる結合であると解されて居る。

余は右の見解に深大なる意義を認める。そうして今日社會學を始め諸般の社會科學の對象決定問題の根柢に存するものは、右の見解に於て立てられて居る處の、心的なるものと精神的或は觀念的なるものととの區別であると思ふ。社會學及び其他の社會科學の對象たる社會現象或は社會的現實態は、根本的には心的相互作用或は相互關係と其の生産物たる精神的構成物であると見る見解は、つまり右の見解に於て根本的に區別される、心的なるものと精神的或は觀念的なるものととは、本來相結合するもの、即ち精神的なるものはつまり心的なもの、相互作用或は相互關係によりて、產出されるものと見るのである。然るに之れに反して、心的相互作用を以て社會的現實態の根本的事實と見る見解を排斥し、社會的現實態を本來心的相互作用によりて產出されるものでなく、夫れ以上或は夫れ以外に夫れ自身で存立するものと見る見解は、つまり精神的或は觀念的なるものは、心的なるものから本來獨立して存立すると見るにあらずば、確立され得ないものである。又社會的關係と心的相互作用とを根本的に區別し、社會學は本來社會的關係を對象とするものにして、心的相互作用は根本的意義を有しないものと見る見解も、つまりは社會的關係を

心的なるものから根本的に區別される精神的或は觀念的なるものと認めるに非らずば、學問論的に十分基礎附け得られるものでない。併し心的なるものから區別される觀念的なるものは、其の儘で直ちに科學の對象とされることは出来ない。此の問題に就ては後に詳しく論述するから、此處では只簡單に一言するだけに止める。

余は上に述べし如くに心的なるものと精神的なるものとを根本的に區別する見解は、哲學的に現實態の本體を洞見し、本質を諦觀する爲めには甚だ肝要なる條件を指示するものと思ふ。蓋し精神的なるものを、心的なるものと及び物的なるものから、先づ根本的に區別することによりて、吾人は根本的に現實態の本質或は本體は何處に求めらる可きかを、明かに見定めることが出来るからである。かくて社會哲學に於て社會的なるもの、本質を諦觀し、本體を洞見せんとするに當つては、吾人は社會的なるものを精神的なるものとして考究せねばならない。今日獨逸に於て勃興しつゝある社會哲學は、一般に社會的なるものを本來精神的なるものと見て、其の本體を洞見し、其の本質を諦觀せんと努めて居るのである。尙ほ社會學を哲學から區別される科學であることを見る人々も、社會的なるものを心的なるものから根本的に區別される精神的なるものと見る見解を入れて考究するに於ては、自から哲學的となり、其の説く處の社會學は最早純粹なる科學ではないものとなつて居る。是れつまり科學の對象としての現實態にありては、精神的なるものは心的なるものから區別されて認識されるのでなく、心的なるものに包まれるがまゝの、或は心的なるものに宿るがまゝの具體的形態に於て、認識されるのであるからである。

されば余は科學の對象としての現實態は、物的なるものと心的なるものとに區別されるだけで十分である、否な夫れだけに止まる可きであると考へる。そうして余は心的なるものは總て意味あるもの、即ち意味現實態であると見る。かくて余は科學を對象の上から見て、根本的に物的科學と心的科學とに大別せんとするのである。そうして物的なるものとは、余はさきに述べし如く、外部的因果關係によりて器械的必然的に成立し、運動し、變化し、産出するもの、心的なるものとは内在的目的關係によりて志向的可能的に成立し、作用し或は行動し、變化し、産出するものにして、物的科學はつまり物的なるもの、因果的聯結を究明し、心的科學はつまり心的なるもの、志向的聯結を究明せんとするものであると見るのであるから、此處に余は現實態を認識する作用に、因果的聯結を認識する作用と、志向的聯結を認識する作用とを區別する、即ち認識作用を二種に大別するのである。そして因果的聯結を認識する作用を理解と稱し、志向的聯結を認識する作用を了解と稱する。かくて對象の上から立てられたる物的科學と心的科學との區別に相應して、認識作用の上から理解科學と了解科學とを區別する。更に認識作用を理解及び了解の何れに於ても、普遍的なるものを把握せんとする方向と、個性的なるものを把握せんとする方向とに區別し、前者を普遍化認識作用、後者を個性化認識作用と稱し、尙ほ其の區別に基いて理解科學に於ても亦了解科學に於ても普遍化科學と個性化科學とを區別する。そうして普遍化了解科學として社會學を學問論的に確立せんとするのである。併し此處には最早其等の問題を論述する餘白はないから、次號に於て「普遍化了解科學」と云ふ題名の下で、之を概論することゝする。